



教育課程の実施状況に関する
自己点検・自己評価に係る研究指定校事業
研究報告

— 平成20年度指定 —

小学校

平成21年5月

国立教育政策研究所
教育課程研究センター

はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センターでは、全国学力・学習状況調査、特定の課題に関する調査等の調査や各種指導資料の作成等を行うとともに、研究指定事業を実施し、各学校において学習指導要領に基づく教育課程が円滑に実施されるために、特に重要な課題について研究テーマを示し、指定校や指定地域での実践的研究を進めています。その成果は、各学校における教育課程の編成、指導や評価の改善などのために提供するとともに、今後の教育課程や指導方法の改善に向けた資料・データとして、中央教育審議会への報告等を行っているところです。

「教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る研究指定校事業」は、目標に準拠した評価によって得られた児童生徒の学習の実現状況の結果を、学校における教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の過程にどのように生かし学習の実現状況を改善していくかについて調査研究を行い、児童生徒の学習の実現状況の一層の改善に資するものであります。

本冊子に掲載した研究報告には、小学校及び中学校における実践研究を通して、教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の項目及び方法、年間を通しての取組、配慮事項等の具体的な取組の要点がまとめられていますので、これらの事例が全国の学校や教育委員会等の参考となり、今後の学校教育の改善充実に資することを期待しております。

最後に、これまで調査研究に熱心にお取り組みいただいた研究指定校の方々、関係教育委員会等の方々に心から感謝の意を表します。

平成21年5月

国立教育政策研究所
教育課程研究センター長
中 岡 司

目 次

広島県	福島市立久松台小学校	・・・	3
資 料		・・・	21

広島県 福山市立久松台小学校

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価【平成20年度】における研究の要点

I 研究指定校の概要

都道府県名	広島県	学校名	福山市立久松台小学校	校長名	佐藤 眞代
学校所在地	〒720-0083 福山市久松台1丁目9-1	電話	084(926)0562	FAX	084(926)0598
等	e-mail shou-hisamatsu@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp	ホームページ	http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-hisamatsu/		

学級数	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別	計	(平成20年5月1日現在)
	2	2	3	2	2	2	1	14	
児童生徒数	68	69	81	73	69	64	3	427	教員数 19名

学校・地域の特色
本校は、平成15・16年度文部科学省学力向上フロンティア事業指定校、平成17年度より福山市教育支援事業（算数科）の指定を受け、分析（教材分析と児童実態学力分析）を根幹に算数科を中心に、児童の論理的思考力を培うための研究を積み重ねてきた。

II 研究主題

確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもを目指して
～自己点検・自己評価活動を通して～

III 研究のねらいや考え方（教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価を行う目的や考え方、評価対象等についての説明を含む）

「学びのすすめ」に述べられているように「基礎・基本を身に付け、それを基に、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や豊かな人間性、健康と体力などの〈生きる力〉を育成する」ことをねらいとして、本校では研究主題を上記のように設定した。そのためには、現在の教育課程実施状況における児童の学習状況の結果を踏まえ、その指導計画や指導方法及び授業時数が適切であるか自己点検・自己評価し、改善していくことが重要である。
本校の児童の課題としては、基礎的学力は向上しているが、学力差が大きいため、筋道を立てて自分の考えを表現する力が不十分であること、情報を取捨選択し、整理する力が弱いこと、また、学習したことを活用する力が十分でないことが挙げられる。そこで、1年次は児童の論理的思考力と教師の指導力向上を目指し、年間を通して計画的・効率的に自己点検・自己評価すること、2年次以降は1年次の取組をもとに、自己点検・自己評価の精度を上げている。

IV 取組の概要

1年次・2年次（平成18・19年度）		3年次（平成20年度）	
教育課程の実施状況及び児童生徒の学習の実現状況の要約	左記の実態に対応した自己点検・自己評価の取組等	教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の調査研究を生かした改善の取組の要点	教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の結果と考察並びに改善等
①表現力が乏しく、自分の思いを書き出すこと、理由を付けて発言すること、かわりあがある。	・国語科「書く」単元においてC.A.P.D.C.A.(P.D.C.A)の前にCheck・Action)システムで指導工夫改善を行う。 ・言語技術習得を通し、論理的思考力を育てることばタイムを工夫する。	①表現力が乏しく、自分の思いを書き出すこと、かわりあがある。が不十分である。	・ブレテストやレディネステストの結果を分析し、指導案に支援の方法を明記している。 ・結論先行で、根拠をもとに論理的かつ簡潔な表現ができるまでには至っていない。
②指導目標に準じる判断の手がかりを明確にし、ブレテストやレディネステストを作成し、指導工夫しながら実践している。	・各教科や生活の場で理由を付けて発言する児童が少ない。	左記の実態に対応した自己点検・自己評価の取組等	・国語科「書くこと」指導事項の年間計画を作成し、C.A.P.D.C.A.(P.D.C.A)の前にCheck・Action)システムで指導工夫改善を行う。 ・「ことばタイム」と「朝読書」の曜日を分け、指導時間・指導内容の充実を図る。

※「かわりあ発言」とは、友だちの考えにかかわって、自分の考えを述べることで、授業を深める発言である。

<ul style="list-style-type: none"> ・かかわり発音のスキルが身に付いておらず、各教科や生活の場で活用できない児童が少なくない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな場面で教師が切り返しを行うのか明確にもてるように、各学年で教材研究を行う時間を設定する。 ・ことばの年間計画を見直し、問答ゲーム等言語技術指導を継続して行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10月の公開研究会保護者アンケート結果、「大きな声で発音はききと発表」「かかわり発音」については満足度が80%未満であった。 ・指導者が意識して各教科や生活の場で取り組む。
---	--	--

<ul style="list-style-type: none"> ②平成18年度より学力差が縮まったが依然として大きい。「教学的な考え方」「書く」(一学期) 	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科において、全学年IT指導や習熟度別少人数指導を行う。 ・基礎基本の習熟を図る久松台タイムの工夫を行う。 ・スパイラルを意識した単元構成で指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元テスト、「基礎・基本」定着状況調査(広島県)及び全国学力調査共に、通過率が全国平均を大幅に上回る。 ・一学期の単元テストの結果、60%未満の児童の割合は昨年度より減少した。
---	--	--

<ul style="list-style-type: none"> ・一学期の単元テストの結果、60%未満の児童の割合は昨年より減少した。(二学期) 	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科においてレディネステストの結果を踏まえ、抽出児童の学習状況を毎時間Checkし、指導方法を検証を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出児童を決め、個に対応した指導とCAPDCCAによる指導を行った単元では、学年全体も基礎コースの児童の正答率も伸びている。
--	---	---

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る説明責任の状況例

<ul style="list-style-type: none"> ・児童・保護者・地域を対象に年間2回学校評価アンケート実施、公表 ・学校便り、校長便り、自己評価の取組について紹介 ・公開研究会における授業公開・研究報告・研究紀要を通して普及 ・教務主任研修、校長研修会で、研究の概要を発表、普及
--

1年次・2年次の成果と課題

- 自己点検・自己評価の取組をシステム構築と考へ、実践してきたことで、算数科を中心に国語科「書く」だけなく、他教科や学級集団づくり等、体力的な教育活動においてもCAPDCCAの考え方で推進できている。
- 次年度は本年度の実践をもとに、児童実態や他教科や領域との関連を考えたカリキュラム編成を考えていく。

V 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価を進めるに当たって、他校等の参考になること

- 単元に入る前(入口)にレディネステストやプレテストで児童実態をCheckし、通してCheckすることで、指導計画や指導方法が適切であったかを評価し、次への指導工夫改善につなげることができた。
- CAPDCCAをシステムとして構築したこと、さらに幅が広がり、教材研究や児童実態の学級集団づくりや体力づくり等、教育活動のいろいろな領域にもシステムとして自己点検・自己評価する体制ができてきた。

○問い合わせ先

都道府県教育委員会担当課 広島県教育委員会 教育部 指導第一課

<ul style="list-style-type: none"> ・ことばタイムでは理由を付けて発言できるが、各教科や生活の場で活用できる児童は50%程度である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導目標、評価規準、判断の手がかりを明確にした上で、児童の反応を予想し指導計画を立てる。 ・算数科における「学びの手引き」を作成し、言語活動の具体的な内容を組み入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一学期の単元テストの到達度は、85%を上回っている。CAPDCCAシステムを通して、自分の考えを筋立てて説明する力が付いてきている。 ・「書く力」を言語表現に活かせるようにしていく。
--	--	---

<ul style="list-style-type: none"> ②単元テスト、「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査では、県や全国平均を大きく上回り、60%未満の未習熟児童の割合も減少した。しかし依然として、既習事項を活用したり、自分の考えを整理し、表現したりする力は弱い。(一学期) 	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科において、全学年IT指導や習熟度別少人数指導で児童実態に応じた指導を行う。 ・習得・活用につながる算数的活動の充実を図り表現力を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元テスト、「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査における通過率が、県全国平均を昨年度よりさらに大幅に上回る。
--	---	--

<ul style="list-style-type: none"> ・一学期の単元テストの結果、「数学」未満の児童の割合は5%未満であった。(二学期) 	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科や国語科「書く」単元等においてCAPDCCAシステムで取り組み指導方法を検証するた。路案に本時の目標に到達するための算数的活動を明示し、数学的な考え方を順序立てて説明できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別学習(算数科)により個に応じたCAPDCCAに基づいた指導を行ったり、基礎基本の定着を図る久松台タイム(算数科・国語科)を工夫したりすることで、未習熟児童の割合が減少した。
---	--	---

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る説明責任の状況例

<ul style="list-style-type: none"> ・児童・保護者・地域を対象に年間2回学校評価アンケート実施、公表 ・学校便り、校長便り、自己評価の取組について紹介 ・公開研究会における授業公開・研究報告・研究紀要を通して普及 ・県内や他県からの視察において、研究の概要を発表、普及

3年次の成果と課題・今後の展望

- 自己点検・自己評価の取組をシステム構築と考へ、算数科を中心に国語科「書く」だけなく、他教科や学級集団づくり、体力づくり等の教育活動においてもCAPDCCAの考え方で実践を積み上げることができている。
- 教材解釈力や児童の見取り、個に応じた手立てのさらなる質の向上を目指す。
- 論理的に表現する発言の仕方、かわり発言ができつつあるが、十分でない。

他校等の参考になること

- 単元終了後(出口)には評価規準として設定した学習状況の実現の程度をテストや作品を通してCheckすることで、指導計画や指導方法が適切であったかを評価し、次への指導工夫改善につなげることができた。

- CAPDCCAをシステムとして構築したこと、さらに幅が広がり、教材研究や児童実態の学級集団づくりや体力づくり等、教育活動のいろいろな領域にもシステムとして自己点検・自己評価する体制ができてきた。

○問い合わせ先

都道府県教育委員会担当課 広島県教育委員会 教育部 指導第一課 電話番号 082(513)4974

平成20年度教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る研究指定事業研究のまとめ

I 研究指定校の概要

都道府県名	広島県	ふりがな 学校名	ふくやましりつひさまつだいしょうがっこう 福山市立久松台小学校	校長名	佐藤 眞代
学校所在地 等	〒720-0083 福山市久松台1丁目9-1 電話 084(926)0562 FAX 084(926)0598 e-mail shou-hisamatsu@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp ホームページ http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-hisamatsu/				

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別 支援	計	(平成20年5月1日現在) 教員数 19名
児童生徒数	68	69	81	73	69	64	3	427	
学級数	2	2	3	2	2	2	1	14	

学校・地域の 特色	<p>地域の歴史は浅く、開校29年目の学校であるが、保護者や地域の教育に対する関心は高く、学校に寄せる期待は大きい。地域の方は、クラブ活動や防犯ボランティア等にとっても協力的である。</p> <p>本校は、平成15・16年度文部科学省学力向上フロンティア事業指定校、平成17年度より福山市教育支援事業（算数科）の指定を受け、分析（教材分析と児童実態学力分析）を根幹に児童の論理的思考力を培うための研究を積み重ねてきた。その研究の積み上げのもと、平成18・19・20年度は、本事業を受け、児童の学習面における課題を克服するために、短期・中期・長期のサイクルでCheckし、Actionするシステムを構築し、実践している。算数科を核として国語科「書く」領域においてもCAPDCA（PDCAの前にCheck, Actionを行う）システムを取り入れることで、指導方法の工夫改善を行い、教師の指導力の向上並びに児童の活用力や表現力の向上を目指している。</p>
--------------	--

II 本研究についての考え方

1 研究主題

確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもを目指して
～自己点検・自己評価活動を通して～

2 研究のねらいや考え方

(教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価を行う目的や考え方、評価対象等についての説明を含む)

「学びのすすめ」に述べられているようにこれからの教育は、「基礎・基本を身に付け、それを基に、自分で課題を見つけ自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や豊かな人間性、健康と体力などの〈生きる力〉を育成する」ことである。本校では、学校教育目標と今求められている学力を基に、研究主題を上記のように設定した。本校の児童の課題としては、基礎的学力は向上しているが、学力差が大きいこと、筋道を立てて自分の考えを表現する力が不十分であること、情報を取捨選択し、整理する力が弱いこと、また、学習したことを活用する力が十分でない。

本校においては、現在の教育課程実施状況における児童の学習状況の結果を踏まえ、その指導計画や指導方法及び授業時数が適切であるか自己点検・自己評価し、改善していくシステムを構築していくことが重要である。そこで、1年次は児童の論理的思考力の育成と教師の指導力向上を目標とし、年間を通して計画的・効率的に自己点検・自己評価することで、教育課程の改善を図ってきた。2年次以降は1年次の取組をもとに、自己点検・自己評価の精度を上げている。

Ⅲ 3年間の主な研究経過と成果

【1年次（平成18年度）の主な研究経過】

期	研究経過	研究成果についての考察
5月	・自己点検・自己評価活動を推進するための組織体制づくりをする。（5プロジェクトチームを編成）	●組織を立ち上げたものの、今ある校務分掌との関連やテーマを模索していたために、各プロジェクトチームの行うべき内容が精選されず、スムーズな運営には至らなかった。
6月	・6月には、全員算数科において、CAPDCAによる全体研究授業を行う。	・全学年で講師を招聘して活用力を育成するための研究授業を行い、研究の視点にそって、今後のActionに向けての協議ができた。
9月	・課題を踏まえて、プロジェクトチームを見直し・改編する。 ・教師の指導力の向上を目指し、授業者は略案を作成し、観察者は授業評価表をもとに視点（学習集団づくり・発問指示の適切さ・活動の場の工夫等）を決めて授業を見合い、事後研修を行う。	○プロジェクトチームを論理的思考力チームと教師の指導力向上チームの2体制に見直ししたことにより、実働しやすい体制となった。 ○若い教員が多く、課題に迫るための「かかわり発言」「切り返し方」「教師の発問」「学級集団づくり」等、協議を行うことで多くのことを学ぶことができた。
10月	・公開研究会において、論理的思考力の向上を目指した研究授業を全学級公開する。	○論理的思考力を育成するための研究の歩みについて、公開・普及ができた。 ●本事業についての趣旨を本校職員が十分理解できていなかったために、十分な普及はできなかった。
11月 12月 1月	・どのような研究システムを構築していけばよいのか模索していたが、本校の算数科における研究システムを生かし、CAPDCAシステムを算数科と国語科の「書く」単元で、取り組む。 ・論理的思考力の向上を図るため、朝のこぼタイムの見直しを図る。1ヶ月間をこぼの重点月間と決め、毎朝（週4回）問答ゲームを行う。	○Check（児童実態把握）、Action（補充）をふまえて、PDCAを考え、実践したことで、CAPDCAシステムを意識した取組を実践することの重要性を実感できた。 ○特に、算数科における単元テストでは、数学的な考え方の到達率が1学期78%であったが、3学期には85%と7ポイント伸びた。 ○全学年・全学級が、一斉に問答ゲームを取り入れ実施したことで、「問答ゲーム（結論先行）の話し方で言ってごらん。」等、授業や生活のあらゆる場面で指導ができ、根拠や自分の立場を明確にした話し方のスキルが身に付き始めた。（12月の児童満足度85%）
2月 3月	・外部講師（ラジオパーソナリティ・小島氏）を招聘し、正しい発声の仕方や伝えることの意義等を学習する。 ・平成18年度の実践のまとめをする。 ・効果的に自己点検・自己評価するための組織の見直しを行う。	○本校児童の課題である表現力の向上を図るためのこぼの学習を、全校児童が受けることができた。 ○平成18年度の研究のまとめをすることで、成果と課題を明らかにし、次年度の研究の方向性を明確にすることができた。

【2年次（平成19年度）の主な研究経過】

期	研究経過	研究成果についての考察
4月	・より組織立てて取り組めるよう4つのプロジェクトチームに再編成し、自己点検・自己評価活動の取組を推進するための職員研修をもつ。	○本校研究の構想に本事業がどのように組み込まれているかの共通理解を図ることができた。 ・指導力を向上するための自己点検の必要性 ・活用力を育成するための自己点検の必要性
5月	・外部講師（ラジオパーソナリティ・小島氏）を招聘し正しい発声法や、伝えることの意義について、全児童が学習する。 ・算数科と国語科「書く」単元を中心にCAPDCAの実践を行う。 ・指導力の向上を目指して、5月より毎月授業観察を行う。	○本校児童の課題である表現力の向上を図るため、Actionとして実施する朝のこぼタイムの礎とすることができた。 ○算数科と国語科「書く」単元において既習事項の事前Checkと復習（Action）を取り入れた年間3単元CAPDCAサイクルで実践することができた。 ●授業後、授業者と参観者で教師の発問を中心に、授業観察評価表の視点にそって事後研修を実施したが、毎月はむずかしかった。
6月	・6月には、全員算数科において、CAPDCAによる全体研究授業を行う。	○全学年で講師を招聘して、活用力を育成するための研究授業を行い、研究の視点にそって、今後のActionに向けての研究協議会をもてた。
7月	・7月（中学年）11月（高学年）1月（低学年）が、国語科「書く」単元において、全体研究授業を行う。	○7月・11月・1月の国語科研究授業において、講師を招聘し、国語科「書く」単元のPlanづくりに向けて研究協議をもてた。 ○年間学習指導計画をもとに、実践した授業時数と作業的体験的活動の内容及び単元テストの結果を記録し、評価委員会で集約することができた。（学期末）

9月	・アンケートの結果を踏まえ、ことばタイムと久松台タイムの内容について、CAPDCA実践の分析・見直しをする。	○アンケート分析を視点にそって行い、HPでその結果と今後の方向性について公開できた。
10月	・公開研究会において、CAPDCAサイクルで算数科の授業を行い、研究内容を公開・普及する。	○単元途中のActionとしての帯タイム学習と授業を公開し、研究のあゆみを報告し、分科会やアンケートで教育関係者の意見を聞き、改善策を立てることができた。
11月	・研究授業の授業分析を行う。 ・表現力育成のための「言語技術指導」の職員研修をもつ。 ・国語の「書く」単元について、高学年の全体研究授業を行う。	○算数科における研究授業を活用力を育成するためのCheckとして授業分析を行い、改善（Action）に生かした。 ○担当を中心にActionとして、今後の指導に生かす「言語技術指導」の研修をもち、表現力の育成について論議できた。 ○校内研究授業を市内小学校に公開し、講師の指導・助言のもと、表現力育成のための指導方法のCheckとして研究協議を行えた。（11月のみ）
12月	・二学期のことばタイムとCAPDCA実践の分析・見直しをする。	○研究授業において、表現力を育成するために授業分析（Check）し、指導（Action）に生かした。
1月	・算数科と国語科「書く」単元を中心にCAPDCAの実践を行う。	○実践記録をまとめることができた。
2月	・研究のあゆみをまとめる。	○2年間の研究のあゆみをまとめ、取組の成果と課題を明らかにできた。

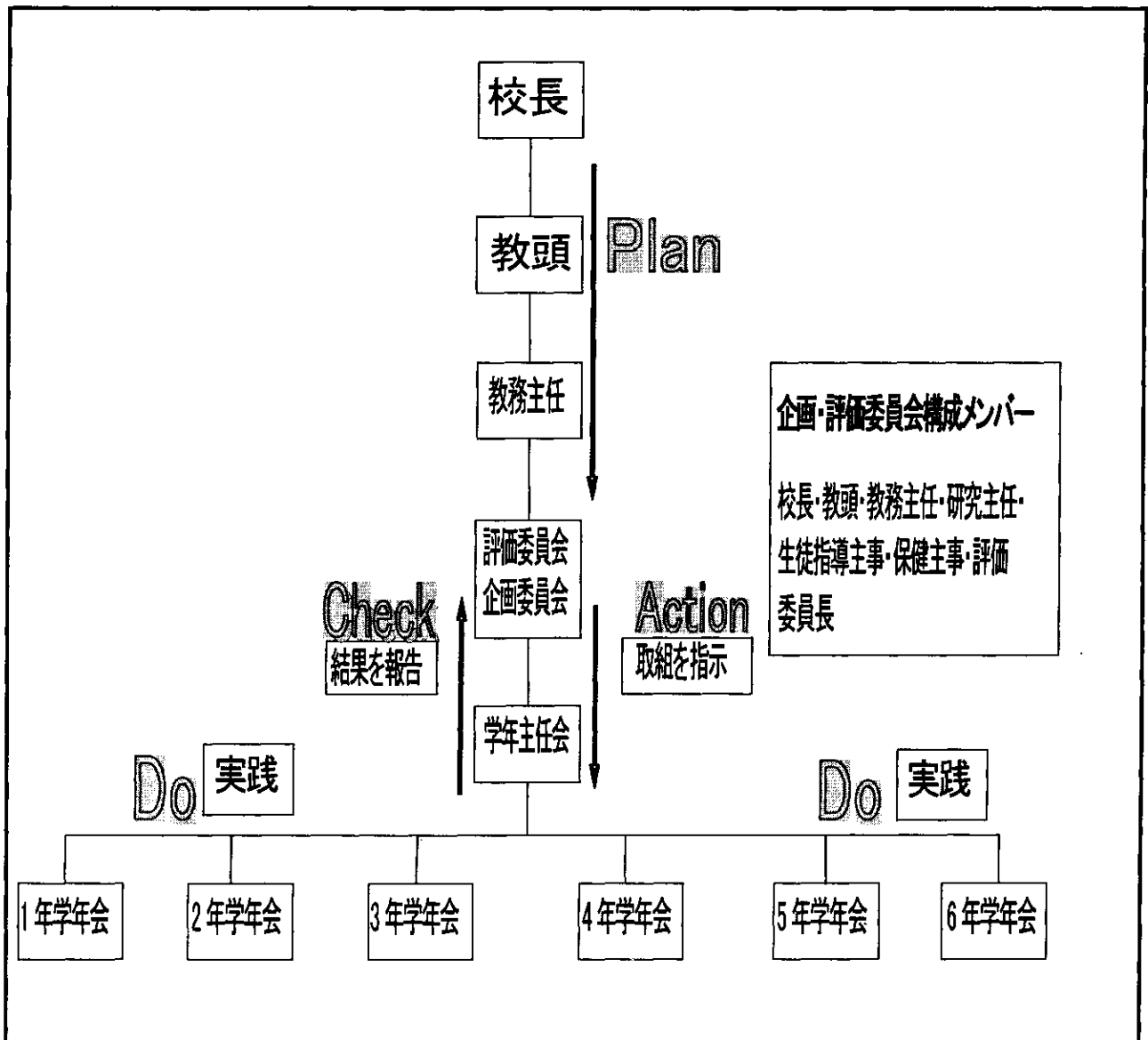
【3年次（平成20年度）の主な研究経過】

期	研究の経過	研究成果についての考察
4月	・プロジェクトチームを中心に自己点検・自己評価活動の取組を推進するための職員研修をもつ。	○本事業の趣旨に対するこれまでの研究と今後の方向について、共通理解を図ることができた。 ○2年間取り組んできた内容を充実していくための構想が練れた。（年間計画表及び評価計画表の作成）
5月	・算数科と国語科「書く」単元を中心にCAPDCAの実践を行う。 ・指導力の向上を目指して、5月より毎月授業観察を行う。	○算数科と国語科「書く」単元において、既習事項の事前Checkと復習（Action）を取り入れた年間3単元CAPDCAサイクルで実践を行えた。 ○授業前と授業後、授業者と参観者で教師の発問を中心とした授業観察評価表の視点にそって論議ができた。
6月	・6月には、全員算数科において、CAPDCAによる全体研究授業を行う。 ・6月（中学年）が、国語科「書く」単元において、全体研究授業を行う。	○全学年で講師を招聘した研究授業を行った。そのうちの2回を市内小学校に公開し、他校の先生からも研究の視点にそった示唆を受けることができた。
7月		○学校視察において授業を公開したり、取組を説明したりすることで本研究の普及が図れた。（鳥取市校長会）
8月	・教育課程の自己点検・自己評価にかかわって、今後の教育課程の改善の方向について研修を行う。	○「改訂のポイント」や「算数科の目標と内容」を理解し、来年度の年間指導計画を作成することができた。 ○講師を招聘し、8月と9月の国語科の研修や研究授業に向けて、国語科「書く」の単元づくりについて協議できた。 ○「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査の結果を分析し、指導方法の改善計画と2学期以降の取組のスケジュールを立てることができた。
9月	・国語科の「書く」単元について、高学年の全体研究授業を行う。 ・9月（高学年）11月（低学年）が、国語科「書く」単元において、全体研究授業を行う。	○プレテストの結果をCAPDCAに基づき指導に生かした。 ○児童に判断の手がかりを明示し、本時の目標に向けた練習合いができるようになった。 ○学校評価アンケートの分析を視点にそって行い、HPでその結果と今後の方向性について公開することができた。
10月	・公開研究会において、自己点検・自己評価活動の取組を通した算数科の研究授業を行い、研究を公開・普及する。	○習熟やActionとしての学習（久松台タイム）と算数科授業を公開し研究のあゆみを報告し、本研究の普及が図れた。 ○「自己点検・自己評価しながら、新学習指導要領をどう進めていくか」というテーマで、文部科学省初等中等教育局視学官と福山市教育委員会指導課次長との対談を行う中で、本校のCAPDCAシステムを活用したスパイラル学習の重要性を再認識することができた。

11月	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業の授業分析を行う。 国語の「書く」単元について、低学年の全体研究授業を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容に沿った授業分析をCAPDCAに基づいて行い、改善(Action)に生かすことができた。 ○初任者研修において授業公開し、CAPDCAに基づいた算数科の授業について説明することで本研究の普及が図れた。 ○学校視察において授業を公開したり、取組を説明したりすることで本研究の普及が図れた。 <p>(高知県黒潮町教育委員会及び校長会)</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> 二学期の久松台タイム・ことばタイムとCAPDCA実践の分析・見直しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校評価アンケートの分析を行い、結果と今後の方向性について、HPで公開することができた。
1月	<ul style="list-style-type: none"> 算数科と国語科「書く」単元を中心にCAPDCAの実践を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実践の記録をまとめ交流することで、今年度の成果と課題を明らかにすることができた。
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のあゆみをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○3年間の研究のあゆみのまとめをすることで、3年間の取組の成果と課題を明らかにし、次年度の研究の方向性を明確にすることができた。

IV 研究の概要

1 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価を行うに当たっての組織 (評価体制や授業等の教育活動の公開を含む)



2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 児童生徒の実態等

この研究指定を受ける前年度平成17年度末の学力テストCDTの結果は、「数学的な考え方」の観点において3学年で60ポイント未満の児童の割合が15%以上であった。国語科においても、根拠を明確にした発言や筋道を立てて考える力が弱かった。

2年間の研究の取組後の平成19年度末の学力テストCDTの結果は、「数学的な考え方」の観点において全国を100とすると、112.7%であった。また、5・6年の全国比は、128.5%であった。さらに、60ポイント未満の児童の割合が15%以上の学年も2学年に減少した。

しかし、筋道を立てて自分の考えを表現する力や学習したことを活用する力が十分でないことが課題である。そこで、基礎的・基本的な知識・技能の習得と学び方を身に付け、自ら主体的に学ぶ力を育成することが重要であると考え。

(2) 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の調査研究を生かした改善の取組の概要 【1年次・2年次(平成18・19年度)の要点】

○論理的思考力の育成のために「かわり発言(友だちの考えにかかわって、自分の考えを述べる)」を一手段として取り入れ実践していく中で「話し方スキル」や「かわり発言」の必要性を感じ、朝のことばタイムの内容を変更してきた。しかし取組方法や取組に対するCheck等の徹底が不十分で、話し方スキルは十分身に付かなかった。次年度は、朝のことばタイムや教科等外の言語技術習得の時間を活用し、具体的な取組内容与方法・Checkのかけ方等を共通理解し、実践していく。

○算数科における本校の研究システムCAPDCAを生かし、個への取組や国語科「書く」単元における実践をしたことで、児童実態を把握し指導目標を明らかにしたCAPDCAサイクルの有効性を実感することができた。しかし、まだ内容は十分なものとはいえず、今後も継続して検証していく。

○教師の指導力向上に向けて、授業観察評価表をもとに授業観察を継続してきたことで、教師の切り返し方やかわり発言のさせ方等の具体的なイメージをもつことができた。しかし、児童の満足度が高い授業力の向上にはまだ至っていない。そこでさらに教材研究を深めると同時に、自己課題を明らかにしながら継続して授業観察を行い、授業力の向上を目指す。

○確かな学力を身につけるためには、スパイラル学習が有効であると学んだ。そこで、算数科を中心にスパイラルを意識して編成した単元構成で作業的体験的な活動を重視した実践を行う。

○表現力の向上を目指して

国語科「書く」単元においてCAPDCAサイクルで指導工夫改善を行うことで、各教科での付けたい力の定着を図った。しかし、「理由をつけて発言している」の教師満足度は、40.6%であった。そこで、根拠をもとに論理的に表現することができるための手立てを考えていく。

○すべての児童を「おおむね満足」に到達させるために


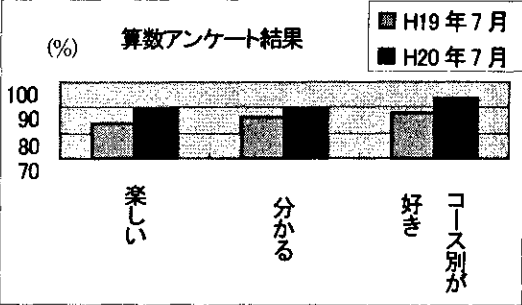
算数科において、全学年TT指導や少人数指導を通してCAPDCAサイクルによる指導工夫改善を図った。また、本単元との関連を考えた基礎基本の定着を図る久松台タイムを工夫し、意欲がもてるように、本校独自の漢字検定を月1回行った。さらに、スパイラルを意識した単元構成で指導を行うために、単元配列と授業時数の見直しを単元テストの結果をもとに行なった。

○見通しをもって学習したり、学習したことを活用したりするために

自力解決の場で、机間指導をしながら適宜児童の考えを把握し、授業構成を考えたり、自力解決が難しい児童への手立てを講じたりした。また、1時間ごとの判断の手がかりを児童に提示し、見通しをもった学習ができるように工夫した。算数科だけでなく、国語科「書く」単元においても提示し、自己評価や相互評価における視点を明確にした。さらに、算数科において、活用力を見取る小テストを作成し、指導の成果と課題を明らかにした。次年度は、教科書分析をすることを通して、単元における判断の手がかりを明確にするために教材研究をさらに深め、ねらいに迫る授業力を高めていく。また、国語科「書く」では、児童が書くことの必然性をもてるように、場の設定や他教科・領域との関係を図っていくことが必要である。

【3年次（平成20年度）】

①習得のための取組

時期	教育課程の実施状況及び児童生徒の学習の実現状況の実態	左記の実態等に対応した自己点検・自己評価の取組等	教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の結果と考察等（把握した成果や改善課題等）																					
一学期	<p>・自分の考えをノートに書くことはできてきたが、筋道を立てて根拠をもとに分かりやすい言葉（説明に必要なキーワードや数値、用語）を使って話すことは十分でない。</p>	<p>○自分の思いや考えを、自分のことばで話すことができる力を育てる「ことばタイム」を工夫する。</p> <p>・ことばタイムで、情報を正しく伝える技術（描写）について扱う。</p>  <p>○本年度も算数科において、全学年TT指導や少人数指導を通してCAPDCAサイクル（単元に入る前に児童実態を把握Checkし、つまづいている所を補充Actionし、その後PDCAによる実践と単元終了後の補充）による指導の工夫改善で習熟を図る。</p>	<p>(1) 〈7月のアンケート結果〉</p> <p>根拠（ことば・図・式・グラフ・実験結果）をもとにした考え方や表現ができる。 (%)</p> <table border="1" data-bbox="922 495 1361 633"> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>平成19年</th> <th>平成20年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>児童</td> <td>70.2</td> <td>75.8</td> </tr> <tr> <td>教師</td> <td>40.6</td> <td>49.0</td> </tr> </tbody> </table> <p>○昨年度に比べ、児童・教師のどちらも5ポイント以上上回っている。</p> <p>△児童アンケートでは、「自分の考えに理由をつけていえますか」「かわり発言ができていますか」が70%を超えているが、教師アンケートの「根拠をもとにした考え方、表現ができる」は50%未満であった。教師が目指す子どもの姿と、児童がもっているイメージとの間に差がある。</p> <p>△児童は理由づけをしようとしているが、内容が十分でないので、児童の実態を考え、各学年「ことばの教育」年間指導計画の見直しをしながら言語技術の指導をしていく。</p> <p>(2) 〈一学期の算数アンケート結果〉 (%)</p> <table border="1" data-bbox="890 1301 1398 1485"> <thead> <tr> <th>児童満足度</th> <th>H19年7月</th> <th>H20年7月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>算数が楽しい</td> <td>83.6</td> <td>89.6</td> </tr> <tr> <td>算数分かる</td> <td>86.3</td> <td>89.2</td> </tr> <tr> <td>コース別が好き</td> <td>87.8</td> <td>93.3</td> </tr> </tbody> </table>  <p>〈理由〉・活動したり考えたりすることが好き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分かる楽しさを感じる ・自分の学習ペースに合ったコースが選べる <p>○ 昨年度に比べ、どの項目も約3～6ポイント上回っ</p>	満足度	平成19年	平成20年	児童	70.2	75.8	教師	40.6	49.0	児童満足度	H19年7月	H20年7月	算数が楽しい	83.6	89.6	算数分かる	86.3	89.2	コース別が好き	87.8	93.3
満足度	平成19年	平成20年																						
児童	70.2	75.8																						
教師	40.6	49.0																						
児童満足度	H19年7月	H20年7月																						
算数が楽しい	83.6	89.6																						
算数分かる	86.3	89.2																						
コース別が好き	87.8	93.3																						

ている。CAPDCAに基づいてきめ細かな指導をしてきた成果といえる。

△新学習指導要領を見据え、ねらいや児童実態に即した適切な算数的活動を行い、活動の楽しさや分かるという実感をもたせていく。

△プロットグラフ（習熟状況を見取る得点分布図）をもとに指導形態を工夫し、進度やコース分けについて学年会等で打ち合わせをする。

○学習内容の習得を図るために、スパイラルを意識した単元構成と授業時数を工夫する。

・前年度の単元テストの結果をもとに、単元配列と授業時数の見直しを行い、指導計画を立てる。

(実践例：5年)

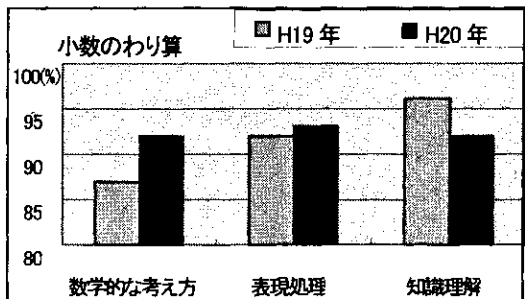
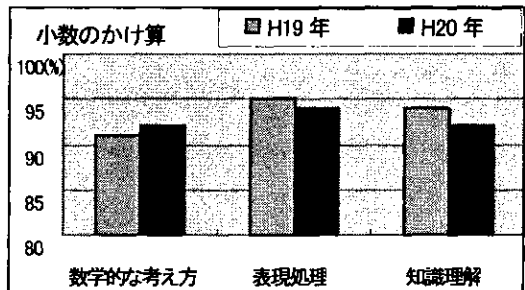
・小数の相対的な大きさについて「小数と整数」で学習したことを、「小数のかけ算とわり算」の計算の仕方を考える場面で使えるように、「小数と整数」の学習後に続けて「小数のかけ算とわり算」を配列し、「四角形1・2」をその後にする。

・学期末に1学期の学習内容を復習し、習得できるように、まとめを5時間にする。

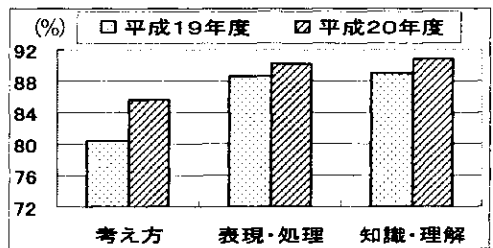
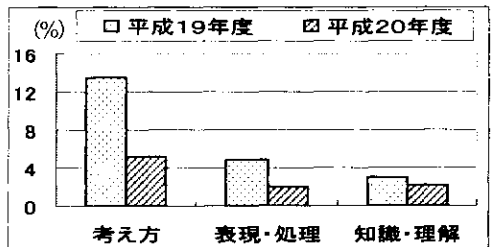
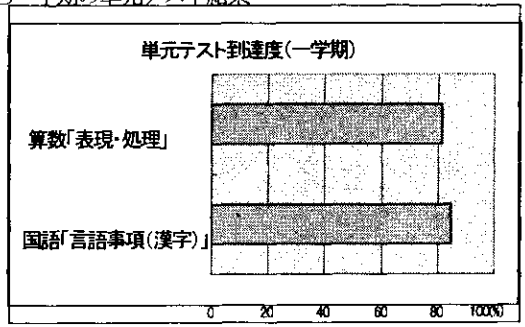
(3) 〈スパイラルによる単元構成〉

平成20年度計画・実施

	H20年 計画 時数	H20年 実施 時数	単元テスト結果		
			考え方	表現・処理	知識・理解
1 小数と整数	14	13	-	91	95
◇計算の見積もり	1	1	80	-	-
3 小数のかけ算 小数のわり算	17	18	92	94	95
			92	93	92
2 四角形1・2	19	17	-	90	96
4 三角形と角	11	9	-	91	96
○くらしと算数①	1	1			
□まとめ	1	5	88	90	95
総時数・達成率	64	64	88	92	95

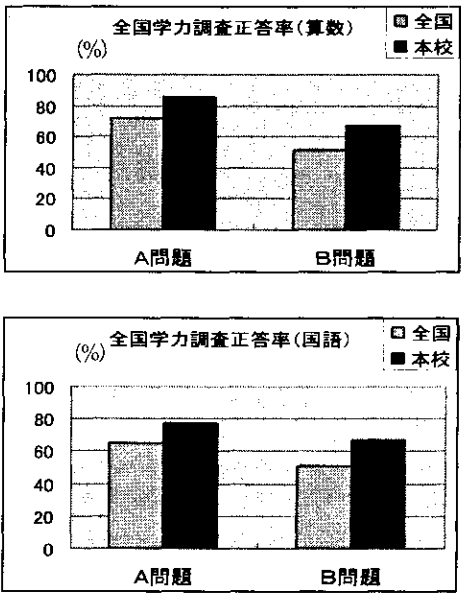


○「小数」の単元を続けて学習し、0.1をもとにした説明を重視して指導したことで、2単元の全ての観点で90%以上の到達度を得ることができた。

			<p>昨年度の結果分析をもとに、CAPDCAシステムを通して、単元配列や時間数を工夫し、また、指導法を工夫改善してきた成果である。</p>										
<p>二学期</p>	<p>・問題解決において、既習事項を活用して考えることが不十分である。</p> <p>・全国学力・学習状況調査において、漢字の正答率が83.9%であった。また、生活で使われている量(重さ・面積)を実感をともなって捉えられていないことが分かった。44.9%</p>	<p>○指導力・授業力を高めるために、学年会等で教材研究を深める。また、教材研究シートにまとめ、指導に生かす。</p> <p>○基礎基本の定着を図るために、Action(補充)として久松台タイムを位置づけ、授業の学習内容と関連させることで、より習得させる。</p> <p>・漢字・言語事項(火・金)と計算・算数スキル(図形・説明の仕方等を含む)(月・水・木)</p> <p>・漢字テストの問題数は、20問とする。</p> <p>・漢字再テストは、検定の翌週に行う。</p> <p>・面積図を使って計算方法を説明する</p>	<p>(1) 〈教材研究シート作成率結果〉</p> <table border="1" data-bbox="925 414 1388 504"> <tr> <th>4月</th> <th>5月</th> <th>6月</th> <th>9月</th> <th>10月</th> </tr> <tr> <td>83%</td> <td>83%</td> <td>50%</td> <td>83%</td> <td>83%</td> </tr> </table> <p>○教材研究を単元に入る前に深めることで、単元を通した「見通し」をもつことができ、安心して授業に入れる。</p> <p>△6月は、校内授業研究の教材研究のため、シート作成までできていない学年があった。</p> <p>(2) 〈一学期の算数科単元テスト結果〉 (全校平均の到達度)</p>  <p>(達成率が60%に満たない児童の割合)</p>  <p>○3観点全てにおいて、全校平均は昨年度を上回り、未到達児童の割合は減少した。</p> <p>(3) 〈一学期の実践結果〉</p> <p>○7月漢字検定90%以上平均通過率 95.5%</p> <p>○一学期の単元テスト結果</p>  <p>○国語・算数ともに80%を超えている。</p>	4月	5月	6月	9月	10月	83%	83%	50%	83%	83%
4月	5月	6月	9月	10月									
83%	83%	50%	83%	83%									

	<p>等, 数学的な考え方における補充を行う。</p>	<p>△漢字については, 似ている漢字との間違いや, とめ・はらいの曖昧が多い。計算については, 計算の仕方は理解できているが, 繰り上がり等のミスがみられ, 漢字・計算のどちらも丁寧さや正確さに欠けていた。</p> <p>☆漢字検定の通過率の低い学年については, 漢字練習のやり方を改善したり, 意欲付けを行ったりする。</p> <p>(例) ・事前に検定日と検定範囲を予告する。 ・家庭での自主学習で, 繰り返し練習させる。 ・合格シールを貼る。等</p> <p>☆レディネステストで未習熟の内容の習得や, 単元内で理解が困難であった内容の補充の仕方を工夫する。</p> <p>その際, 図を使って計算方法を説明したり, 長さや広さの感覚をつかむためにゲーム形式にしたりする。</p>
--	-----------------------------	--

②活用のための取組

時期	教育課程の実施状況及び児童生徒の学習の実現状況の実態	左記の実態等に対応した自己点検・自己評価の取組等	教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の結果と考察等 (把握した成果や改善課題等)
一学期	<p>・学習したことを活用する力が十分でない。</p> <p>・平成19年度末学力テストCDTや単元テストの誤答分析結果, 見直しをもって学習したり, 学習したことを活用したりする力が依然として弱いことが明らかとなった。</p>	<p>○算数科において, 算数的活動を通じた自力解決を重視する。そして, 算数的活動や既習事項をもとに自分の考えを説明できるようにする。</p> <p>・「学びの手引き」を作成し, 児童が自力解決や集団解決においてどのように考えていけばよいのかを示す。</p> <p>○算数科と国語科「書く」において, 判断の手がかりを児童に提示し, 見直しをもった学習ができるように工夫する。その際, 指導者は, おおむ</p>	<p>(1) 〈全国学力・学習状況調査の結果〉</p>  <p>○国語科・算数科のA・B問題ともに全国平均を大きく上回った。昨年度の結果を踏まえ, 授業改善シートに基づいて指導方法を工夫改善してきた成果とみられる。</p> <p>(2) 〈公開研究会アンケート結果〉</p> <p>「かわわり合いながら学習できている」</p> <p>保護者・地域満足度・・・81.3%</p> <p>教育関係者満足度・・・84.7%</p>

ね満足といえる状況となるための指導と支援を適宜行う。

〈国語科「書く」学習活動の流れ〉

何をどのように書くかを考える。
書き方を知る。



毎時間の判断の手がかりを知り、見通しをもって書く。

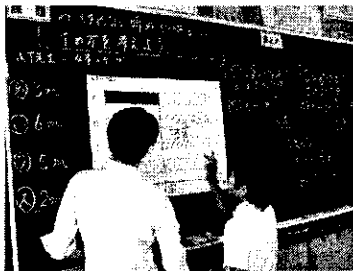


判断の手がかりにもとづき自己評価をする。



判断の手がかりにもとづき相互評価をする。

・指導者が本単元で何を身につけさせるのか、明確にした上で児童に提示する。



○国語科「書く」単元においても、「レディネステスト」「プレテスト」を活用し、児童実態を見取り、ねらいに迫るための指導方法の工夫改善を行う。

・「レディネステスト」…単元全体の判断の手がかりを具体的にし、それ

「意欲的に学習している」
教育関係者満足度・・・95.5%

○児童に判断の手がかりを提示することで、「かかわり合いながら学習できている」「意欲的に学習している」の満足度が高く、学習効果が表れている。

(実践例：国語科5年「人ともとの付き合い方」)

「課題」自分の考えが明確に伝わるように、構成の見直しをしよう。

「判断の手がかり」

☆1：見直しができた。

☆2：複数の事例を順序を考えて配置し、事例の共通点を述べる構成にすることができた。

☆3：☆2に加え、その意図を説明することができた。

(実践例：算数科6年「分数のかけ算」)

「課題」 $4/5 \times 2/3$ のような分数×分数の計算の仕方を考えよう。

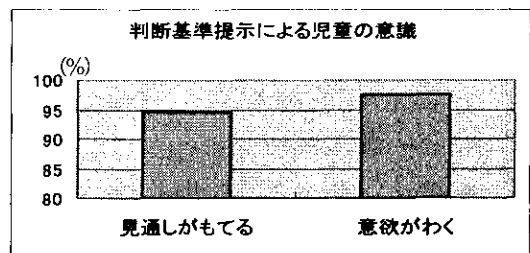
「判断の手がかり」

☆1：答えが求められた。

☆2：前の学習を使って説明できた。

☆3：式を変えて求め方を説明できた。

(3) 〈判断の手がかりにおける児童アンケート結果〉




○児童が、1時間の学習のゴールをイメージすることができ、見通しをもった主体的な学びとなっている。また、授業に対する意欲や関心が高まっている。

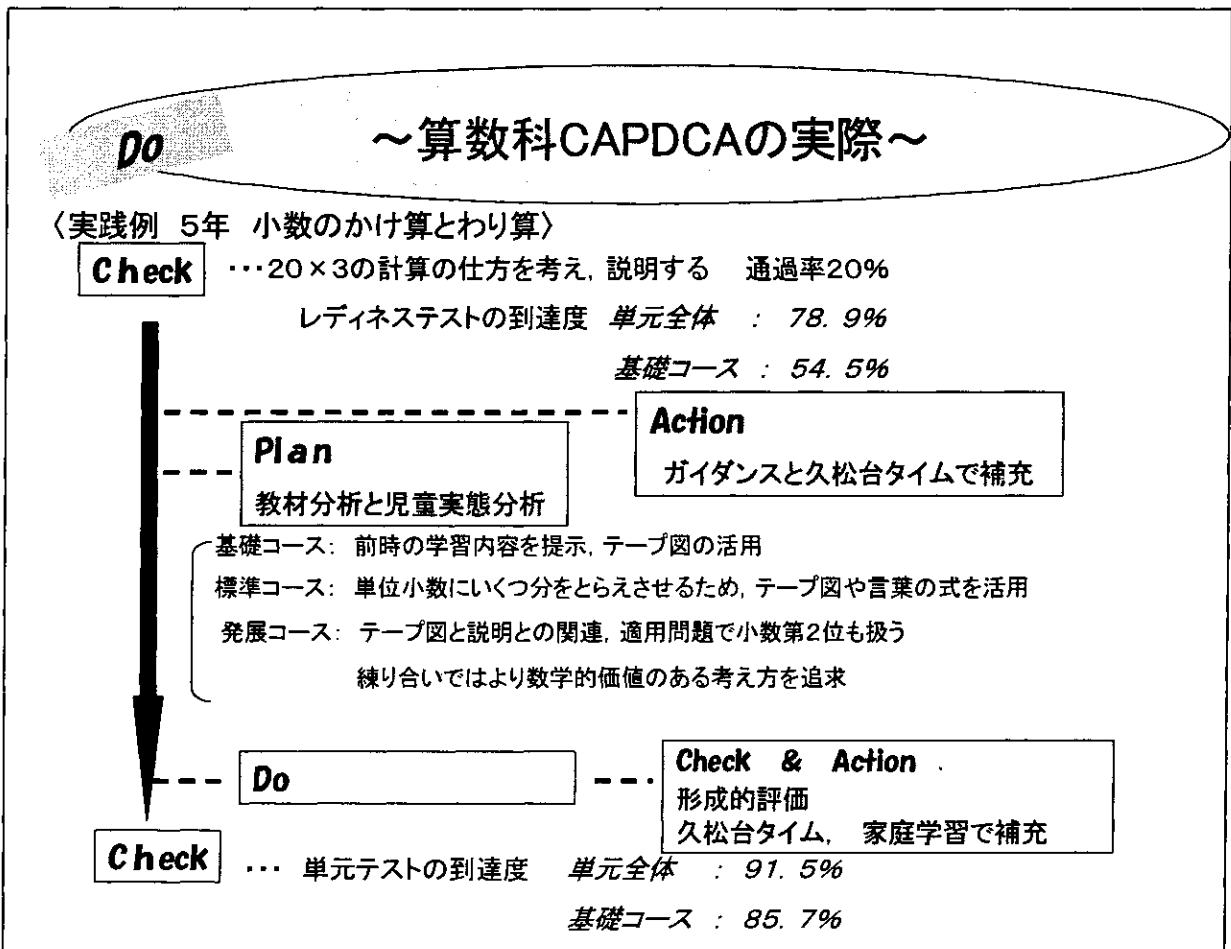
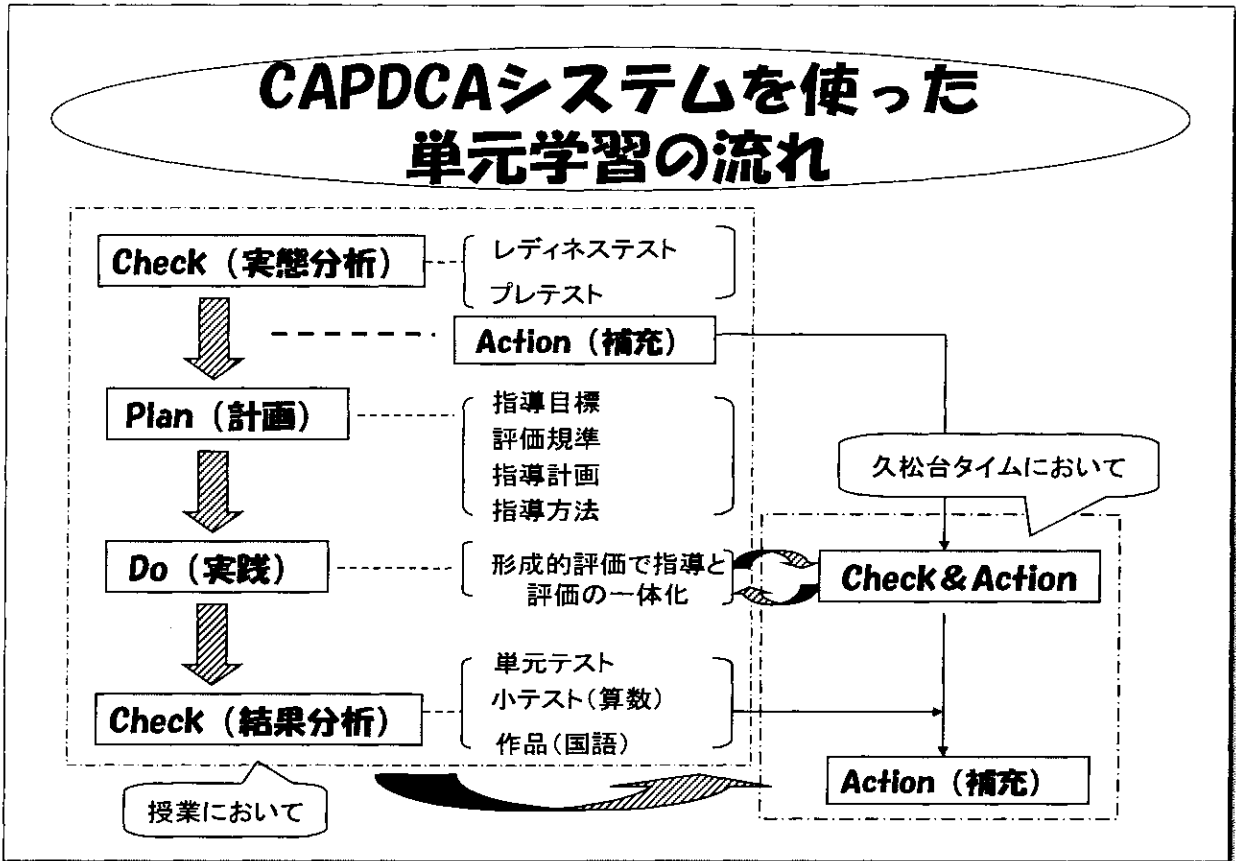
(4) 〈レディネステストの結果〉

(実践例：4年「新聞記者になろう」)

- ・リーダーの名前、応援団の人数・・・22%
- ・応援の種類や内容・・・24%
- ・どこでしているか・・・7%
- ・応援団の工夫しているところ・・・30%
- ・応援を見ての感想・・・78%

		<p>に対する既習事項を明らかにする。結果を分析し、指導案に支援の方法を明記する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「プレテスト」…その単元で書かせたい作品のうち書けそうな内容をプレテストとして行い、結果を指導に生かす。そして、プレテストと単元内で書いた作品等を比較することで指導の振り返りをし、次へのActionへつなげる。 	<p>○児童は、応援団のよいところについて自分が感じたことを新聞に書こうとしているが、新聞には何を書けばよいのか、そのために何を確かめればよいのかが十分理解できていない。5W1Hの必要性に気づく学習展開にしていく。</p> <p>○4年「新聞記者になろう」 単元テスト正答率「書くこと」・・・88% 「言語事項」・・・89% 「書くこと」「言語事項」どちらの観点においても、正答率85%を超え、レディネステストを踏まえCAPDCAで指導した成果が現れた。</p> <p>○必要な項目を選びやすいように、グループで内容や書く順序を検討する場を設けたので、友だちの考えを参考にして自分なりの選択をすることができた。</p> <p>△「聞く・話す」の単元「伝言はまちがえずに」でも、5W1Hを意識した指導をスパイラルに行う。</p> <p>△根拠となる事実をもとに自分の考えを書く力を付けるために、「伝え合うということ」「四年三組から発信します」「生活を見つめて」の単元でも、事実と自分の考えをセットで書く構成をさせる。また、感想との違いが分かるように、複数の例を示すようにする。</p>
<p>二 学 期</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を取捨選択し、整理する力が弱い。 ・全国学力・学習状況調査の国語科において、大きい情報から小さい情報へ分かりやすい順序で書く力が不十分であり、内容を的確に押さえながら、複数の資料から要旨を捉えて読み取る力が不十分であった。 ・算数科においても、複数の資料から考察したり、示された解決方法を理解してその方法で他の問題を解決したりすることが不十分であった。 	<p>○CAPDCAシステムのCheckでは、「単元テスト」と「活用する力を見取る小テスト」を実施することで、指導方法を検証し、次へのAction（補充と指導方法の改善）に生かす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会科や総合的な学習の時間など他教科等の学習においても、複数の資料から分かったことを話し合う場を設ける。 	<p>(1) 〈活用力を身につける授業づくり〉 (実践例：5年「分数」)</p> <p>自作プリントにより、①社会科で学習したグラフを読み取り必要な数値を抽出する力や、②分数倍の意味と求め方を理解する力を育てる。</p>  <p>○5年「分数」 単元テスト正答率「数学的な考え方」・・・85.2% 小テスト正答率・・・・・・・・・・・・・・70.3% △問題解決のために必要な情報を選び、筋道を立てて考える力がついてきているが、まだ十分ではない。</p>

(3) 特に有効であった取組の具体例



3 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価にかかわる説明責任の状況

(1) 主な説明の事例

時期	説明対象	説明した内容と方法	質疑応答や反応等																					
4月	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 校長室便りで本校の経営理念や重点取組について紹介する。 習熟度別学習のねらいや意味、指導方法についてPTA総会で説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学校の様子が分かりやすい。」「どんな子どもたちを目指そうとして取り組むのか分かった。」等 特に転入生の保護者から声が出された。 「どのコースで学習しても、児童に合った指導をしているということが分かった。」という意見が出された。 																					
		<ul style="list-style-type: none"> 日課表と年間教科指導計画で、評価計画を学級懇談で配布し、説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「どんな学習内容をいつするのか分かった。」「ていねいな指導計画がされていてすごいですね。」等の意見が出された。 																					
5月	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 校長室便りや学級便りで、ことばの大切さや取組について伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「便りで取組がよく分かる」の満足度が86.5%であった。 																					
9月	保護者 地域 学校関係者	<ul style="list-style-type: none"> 7月のアンケート結果（児童・保護者・教職員）の結果と今後の方向性を学級懇談で説明し、HPに掲載する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学校の取組が、通信等でよく分かる」という意見が出された。 「久松台小学校に通わせてよかった」の満足度が91.3%であった。 																					
	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 学校便りで、本校の取組を項目ごとに少しずつ解説し、改善点を伝えている。 																						
10月	保護者 学校関係者	<ul style="list-style-type: none"> 公開研究会にて、教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る取組について説明・授業公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者のアンケート結果 <div data-bbox="868 1115 1369 1424" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>公開研保護者地域アンケート (%)</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>H19年</th> <th>H20年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大きな声で発表</td> <td>75</td> <td>85</td> </tr> <tr> <td>関わり合った発言</td> <td>75</td> <td>82</td> </tr> </tbody> </table> </div> 学校関係者のアンケート結果 <div data-bbox="868 1482 1369 1809" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>公開研教育関係者アンケート (%)</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>H19年</th> <th>H20年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>講演・分科会・研究会</td> <td>85</td> <td>95</td> </tr> <tr> <td>分科会・研究会</td> <td>75</td> <td>85</td> </tr> <tr> <td>研究会</td> <td>75</td> <td>90</td> </tr> </tbody> </table> </div> 講演・対談を通して、自己点検・自己評価しながら教育課程を編成することの必要性について、昨年度より理解が得られたが十分ではない。 	項目	H19年	H20年	大きな声で発表	75	85	関わり合った発言	75	82	項目	H19年	H20年	講演・分科会・研究会	85	95	分科会・研究会	75	85	研究会	75	90
	項目	H19年	H20年																					
大きな声で発表	75	85																						
関わり合った発言	75	82																						
項目	H19年	H20年																						
講演・分科会・研究会	85	95																						
分科会・研究会	75	85																						
研究会	75	90																						
	保護者	<ul style="list-style-type: none"> 学校便りで、本校の取組を項目ごとに少しずつ解説し、改善点を伝えている。 																						

(2) 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価にかかわる説明責任に関する成果と課題

- CAPDCAシステムを通して工夫改善をしながら教育活動を行っていることを、学校便りや校長室便り・学年便り・HPによる学校評価アンケート結果公開等により、具体的な取組を知らせることで理解を得ることができている。
- 公開研究会における研究発表や講演・対談を通して、本校の研究について説明し、質疑応答を受けた。本研究の意義やこれからの学校教育の在り方について、理解を得ることができた。
- 他県からの視察において、本研究の趣旨と取組の概要を説明することで、研究の普及を図ることができた。

V 研究の成果と課題

1 成果

- 自己点検・自己評価しながらCAPDCAシステムに基づいてさまざまな教育活動を行うことにより、児童の学力の向上はもとより、委員会や係活動などにおいて自主活動に対する意欲も高まってきた。
- 算数科や国語科「書く」において、単元に入る前（入口）にレディネステストやプレテストで児童実態をCheckし、単元終了後（出口）には評価規準に到達できたかをテストや作品を通してCheckすることで、指導計画や指導方法が適切であったかを評価し、次への指導工夫改善につなげることができた。また、補充・Actionを帯タイムを使ってタイムリーに実施することで成果を上げることができた。さらに、「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査を分析し、その改善内容をCAPDCAシステムで実施したことで、学力の向上につながった。
- 本校の研究システムCAPDCAを生かし、算数科を中心に国語科「書く」領域においても取組を広げて実践をしたことで、児童実態を把握し指導目標を明らかにしたCAPDCAサイクルを定着させることができた。その中で、教材研究や児童実態の見取りについて互いに学び合うことができるようになった。
またCAPDCAを合言葉に取り組んできたことで、学級集団づくりや体力づくり等、教育活動のいろいろな領域にもシステムとして自己点検・自己評価する体制ができた。

2 課題

- 算数科と国語科「書く」単元、さらに学級集団づくりや体力づくり等、教育活動のいろいろな領域について、CAPDCAをシステムとして推進してきたが、教科の特質もあり、他教科に広げての取組にまではなっていない。
- 児童の課題である表現力を育てるために「学びの手引き」を作成し活用してきた。高学年においては、練り合い場面等で意識して根拠をもとに説明できるようになってきたが、低学年ではまだ定着しておらず、友だちの発言を聞いたり、二人対話（隣の人と自分の考えを説明し合う）を取り入れたりしながら表現できるようにしていく必要がある。

資 料

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る 研究指定校事業実施要項	23
--	----

平成 20 年度 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る 研究指定校事業指定校一覧	25
---	----

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る 研究指定校事業（平成 20 年度指定）担当官	25
---	----

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る 研究指定校事業実施要項

平成18年4月1日 国立教育政策研究所長決定
平成20年4月1日 一部改正

1 趣 旨

学校における教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に関する実践的な調査研究を行い、児童生徒の学習の実現状況の一層の改善に資する。

2 研究指定校事業の委嘱

- (1) 教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る研究指定校（以下「研究指定校」という。）は、小学校、中学校及び中等教育学校の前期課程（以下「学校」という。）を対象とする。
- (2) 都道府県教育委員会、都道府県知事又は附属学校を置く国立大学法人学長は、都道府県教育委員会にあっては域内又は所管の学校、都道府県知事にあっては所轄の学校、附属学校を置く国立大学法人学長にあっては所管の学校のうち、研究指定校による研究の希望がある場合には、適切な学校を選定し、別紙様式により、国立教育政策研究所に提出するものとする。
- (3) 国立教育政策研究所は、上記（2）により提出のあった内容を審査し、本事業の委嘱が適当と認めた場合、別途定める実施計画書の提出を求める。
- (4) 国立教育政策研究所は、上記（3）により提出のあった実施計画書が適切であると認めた場合、公立学校にあっては当該都道府県教育委員会、私立学校にあっては当該学校の設置者、国立大学法人附属学校にあっては当該国立大学法人学長（以下「都道府県教育委員会等」という。）に調査研究を委嘱する。

3 研究期間

原則として2か年とする。

ただし、国立教育政策研究所が必要と認めた場合は、本事業の実施を委嘱する都道府県教育委員会と協議し、委嘱期間を延長することができる。

4 指定校数

20校程度とする。

5 研究主題

研究指定校は、次の研究主題を踏まえ、自校における具体的な研究主題を設定するものとする。

目標に準拠した評価によって得られた児童生徒の学習の実現状況の結果を、学校における教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価の過程にどのように生かし学習の実現状況を改善していくか（生かしていく項目・方法、そのための年間等を通しての取組、保護者等との関係、配慮事項など）について調査研究する。

6 研究指定校の運営等

- (1) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、国立教育政策研究所と密接な連絡をとり、その援助と助言を受けて調査研究を行うものとする。
- (2) 国立教育政策研究所は、研究の円滑な実施に資するため、連絡協議会並びに研究協議会を開催する。なお、研究協議会は成果の普及のために公開とすることも検討する。

7 報告書等の提出

- (1) 研究指定校は、校内の研究体制を整備し、計画的、継続的に研究を進めるために、各年度の初めに実施計画書を、各年度の終わりに研究成果報告書を都道府県教育委員会等に提出するものとする。
- (2) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、研究指定校の実施計画書及び研究成果報告書を取りまとめ、都道府県教育委員会及び国立大学法人学長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

なお、研究成果報告書については、第1年次の終了時に中間報告書を、研究の終了時に最終の報告書を提出するものとし、これらの様式、その他必要な事項については、国立教育政策研究所から別途連絡するものとする。

8 成果の普及

- (1) 研究成果報告書については、国立教育政策研究所においてその集録を編集し、書籍、インターネット及びその他の媒体により公表することができるものとする。
- (2) 研究指定校においては、地域や学校の実態に応じて、成果発表会、公開授業、研修会等の開催、インターネットによる情報提供などの取組を実施することにより、本事業の成果を他校と共有し成果の普及を図るよう、積極的な情報提供を行うものとする。

9 経費

- (1) 国立教育政策研究所は、予算の範囲内で、各年度毎に研究に必要な所要額を都道府県教育委員会等からの請求に基づいて支払うものとする。
- (2) 委嘱金の支払いの対象となる経費及び各経費項目への配分額は、実施計画書のとおりとし、変更する場合はあらかじめ国立教育政策研究所に報告し、その指示を受けるものとする。ただし、各経費項目における配分額の変更増減が委嘱金額の20%以内、又は、5万円以内の場合には、この限りでない。
- (3) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、各年度終了後速やかに別途定める収支精算書を、都道府県教育委員会及び国立大学法人長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

10 その他

国立教育政策研究所は、必要に応じて、研究の実施状況及び経費の処理状況について実態調査を行う。

教育課程の実施状況に関する自己点検・自己評価に係る研究指定校事業(平成20年度)研究指定校一覧

— 平成20年度 —

		都道府県名	学校名
1	34	広島県	福山市立久松台小学校

担当官

宮崎 活志	文部科学省初等中等教育局視学官
吉川 成夫	文部科学省初等中等教育局視学官
井上 一郎	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
杉田 洋	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
高須 一	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
吉開 潔	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
大倉 泰裕	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

教育課程の実施状況に関する
自己点検・自己評価に係る研究指定校事業研究報告
—平成20年度指定—
小学校

平成21年 5月

国立教育政策研究所 教育課程研究センター
〒100-8951 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
URL <http://www.nier.go.jp/index.html>
電話 03-6733-6825 FAX 03-6733-6978



石版配合率70%再生紙を使用しています